



「性と健康を考える女性専門家の会」勉強会

## 「出生前診断 — 今、求められているものは？」

講師：河合 蘭

(『出生前診断—出産ジャーナリストが見つめた現状と未来』著者)

日時：2015年7月18日(土)18～20時

会場：朝日エル会議室 東京都中央区築地 2-12-10 築地MFビル 26号館 5階  
(東京メトロ日比谷線 築地駅 歩1分、1階にソフトバンクが入っているビルです)

参加費：会員 700円 非会員 1,200円 学生 500円 (当日お支払ください)

参加申込：お名前、ご所属、会員／非会員の別、ご連絡先を明記の上、

「性と健康を考える女性専門家の会」事務局までメールでお申込ください。

[pwcsh@ellesnet.co.jp](mailto:pwcsh@ellesnet.co.jp)

お問合せ：「性と健康を考える女性専門家の会」TEL03-5565-4919(平日10時～17時)

無侵襲的遺伝学的出生前検査(NIPT)が新型出生前診断と呼ばれて日本に導入され、はや2年が経過しています。この技術は、流産の危険性がなく、かつ高い精度を誇ることから、染色体の検査の需要を大きく拡大しました。

今後も対象疾患の拡大や価格の低下、さらなる精度の向上は確実と見る向きもあり、その時にはさらにたくさんの妊婦さんがなんらかの行動を起こすことが考えられます。

ところが日本では、1970年代に羊水検査が始まった時に大きな反対運動があり、国、自治体は検査に関与しない姿勢をとるようになり今に至っています。

こうした検査の存在自体を否定する声は「命の選別」への警告にはなりましたが、結果的に、遺伝カウンセリングの適切な実施体制の整備を遅らせました。

現在国内で行われている羊水検査、母体血清マーカー検査、超音波検査のあり方には他の先進国と大きく異なる点が多く、極めて独特な状況となっています。

私はこの度新書を書いたことでそれを知り、自身でも高齢出産を経験した者として大きな疑問を感じました。最も気になっているのは、日本の議論は女性を重要な当事者として認識してこなかったということです。

勉強会では、ダウン症候群の胎内治療にチャレンジする動きもある海外の最新事情と日本の対比、そして私が取材で出会った女性たちが何に苦しみ、何を求めていたかをお伝えしながら、きたる時代に必要な準備とは何かを皆さまと考えてみたいと思います。

### 【講師プロフィール】

河合 蘭(かわい・らん)

出産、不妊治療、新生児医療を取材してきた出産専門フリージャーナリスト。1959年東京生まれで自身は3人の子を26歳、29歳、37歳で出産。著書に『卵子老化の真実』(文春新書)、『未妊-「産む」と決められない』(NHK出版)、『安全なお産、安心なお産-「つながり」で築く、壊れない医療』(岩波書店)等があり、今春『出生前診断—出産ジャーナリストが見つめた現状と未来』(朝日新書)を上梓。国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師、聖路加国際大学大学院非常勤講師、日本赤十字社助産師学校非常勤講師。

【Web site】<http://www.kawairan.com>